耶勢曲出本拍子

位中　居

シテ次第

う　[illegible]

[illegible]

[illegible]

まします由承候ほどに身の一大事
をも尋ばやと思ひ只今ようひさんへ
急候　住なれし国を立て雲路の
跡に見なせる山又やまを越ゆけば
こしもわかぬ旅衣野くれ山くれ行と
音てぞ聞し邯鄲の里にも
はやく着にけり　急く程に是は成る

国の邯鄲の枕とやらんは夢を
志す門出の望の吉凶を
あるべし　一村雨のあめ
宿りの月もくらき日も暮ぬ邯鄲の中宿にかりねの
夢も見るやと邯鄲のまくらによる
きかまく　めつらし盧生と申中へき
事のく　汝いかなる者ぞ　楚国

玄帝の地位ぞ
やうの新付昇らせ
ようとやま位よう
ぐ　昇非
うまくまもらぬ
まゝ風とめやく興
こゝろを行とタ
露ぞうりやく

むつこう家もの
かくべきとは思
あらぬ　天うも
ハ面ゝく栄花の
そらこゝろよ人と
う福の恵やお
やうな人ぶも

[illegible]
[illegible]
[illegible]

来前よい日月源氏と云心をまねび
給ひ めでたき事ども多かる中に
伝よつゐ給てなどや五十年せ〳〵
此仙薬とやらん一つ盛まゐく
たらばなどかは夫の心ざしや
つうじいくばくを持らくしまつりつゝ
そも夫の子ども
そも仙家の酒の
名也 かうばしう
盃めり 寿命いちよ〳〵 同く仙家の
栄花のさまも萬よろ〳〵 君もゆるせ
なんとて 上戸
盃 国安全長久乃のく
禁酒等もいやまよ
草乃葡の
めくれやさうづ

[illegible]
[illegible]
よめるおぢさま
書よおろうひ
く、
こく
四季折々の月見
萬次今日よりお
[illegible]
[illegible]
[illegible]

空閣しいや枕乃ゆめとなりけり文殿楼
閣やしるく邯鄲乃仮の宿栄花の
ほどぞ五十年梅亭乃あひられ
粟飯乃一炊の間なりゃめきいや
屋ちりかうやはらく人間気の百
換を棄どうよ百年乃歓楽栄命
たとれば亭そら五十年の栄花社
身乃為に是迄なり栄花乃ゆめも
齢乃ながさも五十年の歓楽も王位
よなきれば是迄なりまよ行るも一炊
気亭 南無三宝さらりとえ
きて出離を求むる知識をぞ祇枕なりぞ栄
かゝるや邯鄲乃まくら石猪やら心さしの亭
乃世をもしちつそうくりと云ふかまへて帰り

まつと

曲出本拍子
位中強　居

盛久

ヲ出テ行よ五屋殿ノ御門ニテ

なよやそうそ

下ヲおかぬ

方へ

清水ニ

ゆるす

立ちれよ

南無や大悲大悲の観

世音ありしも草ぐさもかくもときはの
まつはゞ一称一念其代々のこゝろかまして
てや多年値遇乃御結縁もあり
かくしやがてはいはふ路かしや いつまでも
清水寺の花盛 ゆくもきなづらい路かな
り那 音よきてもきらはやま
湯津こゝろとへ立ち 見渡せば
柳桜をこきまぜて錦と見ゆる故郷の
空ぞまさりけると思ひ出る限り成くさき
東路よ思ひ立ちる路なきき 乎れ
あまざかる馬の家よすれば今より
かられなる在をそ思ひらるの旅行
大道関の東よ鄙き路白河をゆく
浪のいつ海人の言ぐさはかくし 夏の那

よてうくいさまき誘ーやきと気持ち
うてかいつもレテ
がくて他人も独言よやーもうく
おうとれとうきれちやうの会れ。梅も
早かるひてうくよ松家朝お色とうていう
いや沙暁う色ひいの衣うと
仏むうれうくん
梅お初のの時刻うてひよ

依も此狂士屋敷の沙汰も方志やも中と
愚なうがあるこ跡一文の人云仏もも
ひる向よ預うの、、、、、、、、
ら、、、我此年月清吹の観世音を信
依此経を御うまいまい讀誦やうひん狂よ此脚を
へ依此経をうと讀誦や度い

方様よく公屋も見えうく聴やすやぶう
まちおては　方様や大慈大悲ハ薩
埵乃志ちぞ薬王菩薩ハ菩薩哉
直道ころや　ゆうくち無縁の慈悲を
あろ我ぞうし道ひしへぞう生乃利益
をしかきハば其善可ともつゆの動もん
二世乃頼望まんしむるしハバ人聖乃

揺ぎ物あふ康安寿ふめ或遭王難苦
臨刑欲寿終ぐ念彼観音力刀尋段々壊
う方様や此ハ経とを聴やすやをハち命も
頼もしう作へ　聞えよく此聴やすく
扨う此文といつくだらひへ王難の果ぞ
あゝと云芸ぞの級ぐ見え　文殊慈
悪道哉とりよ文ばげ教矣もまち立

まうまれ　うえのそらやみ
べく　今の為よ　此文を　誦もちひ
ニスベ
ば　此悪趣地獄　畜生　餓鬼
ヘバ　ニ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
者以前悪人今滅
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
ましう悪趣をも二悪道のうれ
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
やうやう　露の命　惜ひ
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
ますまうに　逃
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ

云仏ぞ　これは　華一
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
仏ぞ　四方の
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
三界の　利益同
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
男の　ぞよいうそ
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
道うもうか　頼や
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ

きやすう　臨眠の
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
ぬ　受　家
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ

岡
既八寺乃鐘乃音も家朝の声もしも
もやく仏もろよ 仰ぎてをたる
事もれなどよ八重雲乃彼経石りへ
里の妹乃もとへ行べき今もしを限るれも
ぽう此世をつむ乃庭よりくと
立出る 武士前なをかこつぞそ
別乃鳥の拝 鐘もきけもろ東やをよ

龍よ玉乃雲よあを 由井乃汀よ
なの世乃つもりを 梅由井乃汀よ
急まり 専乃路をもろ川ほのやく
玄しの戸数を守めばもろも早を
なをもろ 盛久やりて
もりぽ清水乃かりそめろうやを
向ひて観音のぶ

大刀自丸

大刀自丸なよまろうつぷ称念の声入下
よりもだ刀振揚きいこえいうこぷ経入
きう眼よみきうわぷ知落ちる大刀
みきぷ一よあわく
ちる水底 盛久も思う外
あれだく仕舞もあるわいやく
行すす経よへぷ汁狂後神の心経入文

陰刑欲寿経

会彼観音力 刀寺
悪口ここ壊乃 経文ありるよ日雲り有ら御
仏よあわよろりませてわかりまり里
ぷう私乃は経やぶり汁ろきう
めつそこいき奇まあれこのよ仕ふよ
雷まのれがぷよ陥び盛久の鐘会ふよ
しありまもく。めるま盛久法前

一天窗ハなうう
うまうまうまとみ
深の梨地を吹白銅の松竹梅を高
くうう松の枝よう
下
唐様うう松うう
天意大悪人
一音ゆうても
孫の哭うのうう
月元
多年の恩を抽
ぶ易く思うう
下
のうて受
貴くなひて欲
頼朝卿を高

[illegible]
右筆ども[illegible]得かり[illegible]
貴命あり[illegible]感久[illegible]
[illegible]
あひく時なきや[illegible]
[illegible]天空海[illegible]
[illegible]日のもと[illegible]
[illegible]
[illegible]

曲出二ノ拍子
位閑居

息女婦を鈴るしいうかなる
なるぱつまをハ興津ちうたつるを
詠ぶまくも此
十三
しかうろう跡ろへぞの喜平の
如ときぱ紀のうる言ひつなふい世
嫁ぱを勧くぱつくく晩を
哉ありぱ
さ
ぱまうだよおのさびき秋の衣哉
ぱめまれちうち古寺庭の松の更
ふうぱ月もかうぱ行端のもよおもわく
まそいうへもぱ見ていつ迄の
物のおそまぱうぱ行下もろ
出ぱよい強ぱ世平うれウいつと
まく一節よ頼母

びそとへはの聲ヤ言ひもんくてう
ちを絵ふ物
うのひぐ
四方の秋の
ぎいぐ
こそぴの音
清
秋沈寺よやも
ぴとのめまる
ぴびめ
の氣色み
まぐ
沈寺の
くろとそ
そも塚の陰

吉野にて
ふるさとの(よしの)山(やま)にて
松(まつ)も老(おい)たる塚(つか)の跡(あと)
跡(あと)の下(した)村(むら)
くれ初(そめ)て草(くさ)
塚(つか)の真(ま)
きの穂(ほ)
古(ふる)への
委(くわ)しき
▲
葉(は)
月(つき)の秋(あき)
首(くび)
神(かみ)
ゆふべ
月(つき)
人(ひと)
や君(きみ)

君もゞ紀
讀し故もゝ
えうの芳
上京地
こうやうう
ありやなん
憲ごろも紀
此の立田山
北
ねまぎやねい
女
紀ノ国ぶ娘ども
女
そんかも
丙上
いつやきの縄
芋いつ井
まろく
うまの月

四番目
四番三番

三井寺

曲出一拍子トル
伍開上ハヨリ立

ニテ女サレ、
来南無屋大慈大悲
尊ざるもの
トニニニニニニニニ
れ頼まれまし
ぞとかさのたらず
甲斐なくんとぼ
慚ニイテ思ひ

[illegible] 松虫の
[illegible] 松虫の
[illegible] 松虫の

江州園城寺乃住僧ふくいぬもう
渡んたさいなる人へ乃愚僧と頼ぜ仕
同がるく的勇乃熱物をするやくく
ぜ今夜ハ八月十五夜明日ハてん狂よ
ぜきんを伴ひ中ば頃く海堂乃庭う
出くぜを詠ぐやとも、ねし上ウ鞠白なふ。
ぐとをぜ乃ご宵どそぐくぜおがを

ぬぐんごろ初ぬも法なよ雲外
ふやぬくようぜ乃ん。日撒
うれくぜをぬくぜ盛度油をくへ
まゝ花乃ぜきいと詠ぎまし志ぜ乃山
越うるくなぜめ乃ま方湖ぬよな
てらぜ數乃山高ぎんとぬ鶯のおと
ぬんとぜ今日乃前よぬまま事よぜう

松ま吹風もさえまいれ月の水の二井
寺よりもよそもやはり二井ぎよぼやく付よ
まり・ヨリ桂もこの五つのてまりぶま
月よありくづれて庭の木陰よやもうくべ
安上ニ
ごす里の外のねぬべ玄心味の面そそ
月すこしかぞよまきべ秋もそれうおも

なぐ・ヨリ
ぶかけあよ鴻くぬも霊崖の
森みて海むしろや・月いむ
かぜ月ろまひろの鏡むやまはるがそろ
わく船ろうかよ人ろくをぶの
さうぐもつづ母をこぐわくいぐ
笑ふべをもし面白の鐘の

音やおぼえず鶏も
うく音かやめ
ごゝ年の古寺鐘ハあ
聲ハ風とび波やや
海の都ゑもおぼ
弘ゐが水仏乃縁よ
とくごろなり
うぐひす月やや鐘ハ
潜狂べの為うて行
あるぐのふえ
釜もつもぶる海ぎ
ありめ
狂べ乃為して鐘つ
うぬるまく有ぞ

清見ず乃鐘を
よさ波乃
昔ようれ
沖鐘ゑ卿ゝや
ばく蛸も鐘あれば
ほもてもうね
歌うされゞ霜夜
鐘をがくゞ
度云が様う
鐘もつ也ゆ
ぬべのこと
うくべま事思も
よ

月は鐘つくうち狂べうてお酌ひ給うそ。
この詩よいくに聞こえ
ぎんぐくうて雲闇をいづ渋ばかも
かつもうべ月よ向つくもともうて
ど三宵一輪こてうち清え行きの旬よう
なくと光をまうまてあまりの
うれさ心乱き高楼よ登つく鐘

・鐘の時

をつくづくうとぶめうまむべ詩柱と
乱き心ありもだよりうち
ゆうし給へやくぐよ煩悩ら。をそた
やら法ら声もまあの鐘をつく
時当諸行無常とひうをやなお
ら鐘をつくれ日是生滅法と響く

今ひぐらし
入逢の寺の鐘
雲遠く鐘の音
煩悩の眠りも
なでぐやうきやうや
なおの鐘よ
なくて明さま

晩鐘
鹿
為楽と響て
百八
障
久長楽の鐘の音

雨ふるよふな
人言茂ふやしの
砂乃もよの鐘
昌寺の月もこもる
法乃色もん

松の水よつまる
諸仏
諸行
無常
諸法
無我
涅槃寂滅
是生滅法
生滅滅已
寂滅為楽
滝池乃柳しの
秋の霜
夜半の鐘の声
寂滅寺
乃まもゆるし

ありくみをしべ入(いり)
[illegible]
[illegible]
[illegible]

武士の面目なれど、子故に迷ふ親の
身の恥を人に思ひ量れば 悲しさは
ろしなる御身や今前めも叶はぬ物を
逢ふと悟らぬ様にうち物云ふも
表は母に隠しつゝ、涙を呑みて餘所
まくる涙の月 子ふ逢ふ程親と子と
縁の薄き身の果敢なき 身を知るを

今宵しも 此三井寺にひゞくく
親子の逢ひは 何故ぞこの程の聲
鳴りてわびるひのあるぞかしとて、心得
有しゆへ、あれば、鐘のちからに、叩きし
鐘といひしは親子のためのなつかしさ
ながねゆへ子の母のよる方もしらず、鐘うち
拝みけれ かくて如何ひ立帰りし

奥へと志てゆくに秋津洲の国ぬしの道ぶくぼ
ろ〳〵ことのわくもと春霞たなびく河の関路ときけ
ば松風もさびつゝ夕霧のいとゞしく宵
の寝もかたしと夜ぶかくもりく
行の関をもこえよあまつ道の

みてゆく度き方へゆくやと思ふ
ぶくぼろ〳〵行人の沙伝のくよ
ろこぶ事乃ん
ふ前をうてゆくしみ思
ふ〳〵かな雁やきれをも珍うく
ぎりそ年越行の法下向の時をお
遁ろて音ぎ海をも遁ろ

中
きてみまの者を弥
松さひら陰踏みら
のとかる勢多の
昔人海面うてく
よたる江ちまう
笠かへ梅の沈塚のよ成うる采ん
柳うてんひきるそや宮川岩か水絶
てげうひ柳朽弥
わいろ梅の世ろ雲
とうむう横鉋よ
梅の名ろ世ろ雲
ふみろ昔人
ろ加面仍藤芸衛憲清出家西行と
つえそ寺人沈國上

びん水や月半ばこぶし咲くころ

なよなよと立ちもとまらず一首を詠

詠草多き　年頃

鈴木いたれりつくせりいたれりつくせり

おく山に人の詠み行きの言葉

聞やうし　七月

なまこうつ音も洗濯集をいぶせがるかな

新古今よ　上巳同

菖蒲のよび清水ありて柳

かいまきのくずれてそうとまわ

寝すがたの味のせとものぬる

寿すうちやかんて寿人人来

ばた十会とうろうれ前をとうる

かい打すみ柳のかい古塚ようかとんて

笑みのうりくり　年内

柳乃舎やねの打すみ

柳乃舎うちまねとと

思ひの珠の数くりて
秋の入の拝うらそ
暮ぬるものうく露さかく
像恨もひのら初
ず又の柳吐えく
ちひ竹の直み

ふ里秋人ふ必得
孝才を(も)ぐ事
繁もみそ白
死もそ(ま)も
今夕重(里)
ず又柳のすの
拾人ぶの特

南無や灌頂帰命頂礼と願いても
まゝならぬ世を学びの道の遮碍をも仮そ
他方の母よりうみの船乗りや彼
三つ子の事。一切の船乗りや彼
黄帝のくらそきという心ばや秋空の
音よ数うる柳の一枝乗りよ。蜘蛛乗
三のくらりうよ乗り。乗り渡うよ海うの上を

出もする母乃(商)
其外玄宗華清宮うつ楊貴妃の柳の徳うう
柳寺あり花うて詠め飽ぬ名水
いのくが文みうう流浪と雪名
しみよみ入雪色のそうそひ打ぬの
柳忽ち楊柳観音とあうれへう

絶まねばやうやく利生うるほふ歩を
もとみ霊地あり。ぱりきい部玄記感
ぱ文人の市廛通ふも。琥珀の庭の面
ぱひの木陰松
皆人の音 柳桜
かりる諸人のや
津うる月の旬ひ

ぶまでゆう
ぞ
羽のまひ　柳
えよそう　柳
蓬入ぶまひの狭もをひくそぶ
ぬまそぶ入柳

縁ある人の死は法要秋の風
そゝひ露もすの世も数そよお経も
こうもりくよ水果そのうも
打ぬよぶよ

今百番者観世左近本支當流
以章句并傳之秘蜜拍子付
尚加吟味改正文字板行也

元禄三庚午年九月吉日

寺町通二條上ル町
寺田与平次板行